

國際宋代文化研討會と全宋文編纂室

土 田 健次郎

ここで報告・紹介するのは、一九九一年に中華人民共和國・四川省・成都市で開催された國際宋代文化研討會と、その主催母體の一つ四川大學古籍整理研究所全宋文編纂室である。

一、國際宋代文化研討會

國際宋代文化研討會は一九九一年七月～八月に成都市郊外の金牛賓館で開かれた。この賓館はもと幹部の宿泊施設であったが、設備が老朽化したため一般に開放したとのことで、各種會議によく使用されているらしい。比較的ゆったりした間取りと廣大な庭園はけっこうだが、鍵を各フロアの係が一括して保存するといったところは昔風である。また車の便、事缺かぬ幹部用施設であったせいかタクシーの便宜が無く、

またバスを使うにも市内までは途中で乗り換えねばならず、町にくりだすのにはいたく不便である分、學會参加に集中するにはよい環境であった。

今回の會議の主任は孫欽善氏（北京大學教授・北京大學古文獻研究所所長）と曾棗莊氏（四川大學教授・四川大學古籍整理研究所副所長・全國蘇軾研究學會副會長）のお二人で、全體の運行をきりもりされていた。學術組召集人もこのお二人で私もその召集側のメンバーに入れられていた。このお二人の肩書きを見ても知られるように、今回の會議は中國における宋代の古籍整理の二つの中心の主催という性格のものであった。四川大學古籍整理研究所には全宋文編纂室があり、ここでは周知の通り『全宋文』を編纂刊行している。北京大學古文獻研究所の方では『全宋詩』を編集、北京大學出版社

から刊行を開始した。

参加者は中國國內では、各大學の研究者たちが中心であるが、やはり四川大學関係者が多く、その他では各地の古籍整理關係者が目についた。外國からは、日本では私の他は、伊原弘氏（白百合女子大學）と大西陽子氏（お茶の水女子大學大學院博士課程・當時南京師範大學留學中）の二名、ドイツから近代專攻の Magnus Kriegeskorte 氏（Trier Universität）と夫人、アメリカからは蘇軾研究者の Kathleen Tomlonovic 女史（Western Washington University）、チエロからは Marta Ryšavá 女史（Československá akademie věd チェコスロヴァキア科學院東方研究所）、韓國からは杜甫の研究者の李丙疇氏（東國大學校名譽教授）、あと臺灣から男性二名、女性二名といった顔ぶれであった。日本からは他にも参加豫定者があったのだが、病氣などの理由により來れなかった。また八月に北京で開催された宋代史の國際學會につながる日程は主催者の配慮であったかもしれないが、逆に強行軍になるのを考慮されて缺席された向きもあったと思われる。ともかく参加者は一〇三人を数えたということであり、外國からの参加は寂しかったが、國際學會として一應の規模はあったということになろう。

國際宋代文化研討會と全宋文編纂室（土田）

まず日程を掲げておく。

七月二九日 参加登録

（夜） 打ち合せ

七月三〇日（午前）開幕式〔四川大學學術交流中心三階會議室〕

四川大學文科樓で、圖書の展示と古籍整理研究所の見學

四川大學校長招待宴〔四川大學學術交流中心二階餐廳〕

（午後）大會發言

（夜） 交流會

七月三一日（午前）分組討論

（午後）大會發言

八月一日（午前）小組討論

（午後）杜甫草堂、武侯祠見學

（夜）川劇見物〔錦江劇場〕

八月二日（午前）大會發言

（午後）大會發言

閉會式、宴會

八月三日（午前）眉山の三蘇祠見學

(午後) 樂山、烏尤寺見學〔峨眉大酒家泊〕

八月 四日 峨眉山見學〔峨眉大酒家泊〕

八月 五日 宿舎歸還、解散

前日に急に依頼されて私は開幕式で話をする事になった。私は、故・吉川幸次郎博士の『全唐詩』はあるが『全宋詩』はまだない。もし出現したならば、おそらく總詩數數十萬首、『全唐詩』四萬餘首の比ではないであらう(『宋詩概説』、岩波書店、一九五二)という言葉を引きつつ、『全宋文』、『全宋詩』の刊行の意義と、宋代研究の可能性について述べた。壇上には『全宋文』、『全宋詩』編集の中心にいられる曾棗莊氏と孫欽善氏が司會されていた。宿舎の賓館にもどつての講堂で開かれた大會では、順番に発表が行なわれ、それに對して質疑がなされるという形で進められた。ただ誰が発表するかは事前に本人に言われるのみで、我々はあらかじめレジュメを読むといった準備ができず、進行についていくのには難澁した。また通譯が一切ないうえに司會が往々にして強い四川なまりであつたために外人はとも質疑に入れない感じであつた。発表の内容については、既に出版されているこの會議の報告集『國際宋代文化研討會論文集』(四川大學出版社、一九九一年一〇月)を参照される方が早いであらう。

それに比べて分組、小組の方は比較的收穫があつた。それぞれ宋代文化の淵源、盛行、傳播という形と、文學、思想・宗教・歴史、その他、という形でなされたグループ分けも、いわば縦と横から宋代を検討するという事で、なかなか工夫されていたといえる。私は思想・宗教・歴史の第二小組で、「制度與人——王安石對『周禮』的解釋」という題で発表した。その後なされた諸氏の論評からして、私の発表意圖はとりあえず理解してもらえたようである。なおこの第二小組は、まず趙宗誠氏(四川大學宗教研究所)の「宋代道教興盛的原因」を皮切りに宋代道教の話で盛り上がった。道教と國家の關係、趙氏の議論では北宋は説明できても南宋は説明できないとする反論、南宋道教をどう捉えるかについての議論、景靈宮、道觀制度の問題、更に廣く宋代における三教合一の問題、道教と理學との關係等、關心の廣さとの確さは、さすがこの地が中國における道教研究の本場であるだけのことではあつた。ただ四川の學者が大半であつたため、四川方言の辯論大會のようになってしまい、普通話でも惡戰苦闘する私にはかなり聞き取りづらいものであつた。終了間際、皆から「四川方言はわかつたか」と問われて、おもわず曖昧な微笑を浮かべざるをえなかつた。

あと交流會であるが、これは各國の宋代研究の狀況を紹介するといふものであった。私も日本の現狀を述べるはめになったが、思想史を専攻する私には世界に誇る我が國の宋代史研究の成果を述べ盡くせなかつた憾みが残っている。なお同席されていた伊原弘氏も歴史方面の成果について紹介された。

當然一日の日程が終わつたあと、部屋をたずねあつての交流もあった。そこで何人かの四川と廣東の研究者、それに巴蜀書社の人と話し込む機會を持てた。さすがに文化の誇り高い蜀の地だけあつて、四川の研究者はこの土地ならではの研究をする人が多かつた。例えば思想史ではこの地の出身者である張栻（南軒）や魏了翁（鶴山）の研究、歴史では南宋末の元との戰爭についての軍事史、それも元代に編纂された資料は元朝の立場のものであるから、もう一度南宋末の四川の實狀に即して再検討しようというもの。こういう開催地に密着した學問的な情報交換は、中國の國際學會に参加するメリットである。

見學旅行は四川が初めての私にとっては興趣盡きないものであった。范成大の『吳船錄』と重なるコースをたどれたわけで（實は時間を見て何人かの研究者とともに青城山、都江

堰も見學した）、長江側のルートの一端を體驗できた。蘇軾の出身地眉山がこのコースの要所であることも改めて實感した。會議終了後、劍門關を越えて北東の棧道方面に行き、廣元（昔の利州）で一泊してきたが、蜀に入る二つのコースを迎れたのは今回の收穫であつた。

閉會式とは一時間に垂々とする曾棗莊氏の總括であつたが、その内容は報告集にも載せられている。ところで一九八七年に私は廈門の朱子學の國際會議に出席しその時の報告を本誌に書いたことがあるが（『廈門朱子學國際學術會議』、『東洋の思想と宗教』五、一九八八）、その時中國の三、四の雜誌にのつたこの學會の總括はおおむね承服しがたいものであつた。つまり、私がほとんど印象を持てなかつた發表に贊辭が呈せられ、かなり積極的な關心をかきたてられた發表が話題にもされていなかったのである。これはもう彼我の文化の差などということではすまされないことであろう。もちろんこちらの判定基準を絶対化するつもりはないが、それにしてもあまりに違いすぎるといふくらいだちを持つのはおそらく私だけではあえてきているのであるから、そろそろ各々の研究方法の異同を徹底的につめて検討する段階に入っているのではなからう

か。私は普遍的研究方法の確立が容易に達せられるという樂觀を持ってゐるわけではないが、「刺激的」とか「示唆に富む」とか或いは「背負っている歴史の重み」とかいう話に止めぬ妥協の無い檢證が要求される時代にきていると思われるのである。思想史研究の閉塞狀況に對する反省からも、長時間かけた研究方法の國際的檢證が切に望まれるのである。

二、全宋文編纂室

今回の會議の案内を受け取り、参加に食指が動いたのは、一つには宋代の文獻の收集整理について示唆や情報が得られるという期待もあつたからである。なにしろ『全宋文』編集の本據地で開かれ、共催で『全宋詩』の編集據點も参加している會議である。

しかし會議それ自體は特に文獻方面の發表が多いという性格のものではなかった。むしろ短時間ではあつたが、四川大學古籍整理研究所、特にその中の全宋文編纂室の見學が大きな刺激を與えてくれた。なおこの編纂室については、同行の伊原弘氏も「國際宋代文化檢討會と『全宋文』の編纂」(『東方』二二九、一九九一年二月)を草されている。

四川大學古籍整理研究所については、配布された『四川大

學古籍整理研究所簡介」(一九九一年七月)及び同名の文章(『國際宋代文化研討會論文集』所收、四川大學古籍整理研究所、一九九一年五月)によつて沿革と組織が知られる。この研究所は一九八三年に設立。専任は二十三人で、そのうち研究員は教授三人、副研究員一人、助理研究員一人の計十八人。この十四人は博士あるいは修士の學位を持つ。中文系の楊明照教授が學術顧問、歴史系の繆鉞教授が名譽所長をとつとめ、實際の活動は、曾棗莊、劉琳、王曉波の三人の副所長がとりしきつてゐる。宋、遼、西夏、金の古籍の整理と文化研究を中心に活動し、現在『全宋文』、『全宋文研究資料叢刊』を編集、『全金文獻』、『全金文獻研究資料叢刊』の編集準備をしている。

さて『全宋文』であるが、この編集経緯について曾棗莊氏の「『全宋文』編纂紀事」(『古籍整理與研究』第五期、一九九〇年一〇月)をもとに略述しておく。

一九八四年の夏、『全宋文』編集の可能性の検討が始められた。まず問題になつたのが、書籍と人員。そこでまず成都における資料調査から開始され、その結果、四川大學圖書館と四川省圖書館の藏書が豊富で、「宋人別集館藏情況登記表」を編集してみたところ八五パーセントが成都で解決できるこ

とがわかった。ただテキストの質の問題があったので、それは北京やその他の地の學校の圖書で補った。次の人員の方は、幸い四川大學は既に宋代の歴史と文學を研究する人材にめぐまれていた。もともと研究所には大學院修了以上の水準のエネルギーな研究員が一〇名以上いたし、四川大學には中文系に唐宋文學研究室、歴史系に宋史研究室がある。ちなみにこのような條件のよさをもとにした宋代研究のメッカとしての自負は、開幕式で前所長の楊明照氏（中文系）も述べていた。出版とそれに關わる諸費用とその他の具體的援助、更には『全宋文』の副産物の出版は、地元の巴蜀書社が引き受けた。ところで體例をどうするかという段になって、多くの問題に逢着した。この詳細については曾氏の文章を見ていただきたいが、このような大規模な事業を推進する際に伴う學問的困難をのりこえようとする氣迫には、衿を正さしむるものがある。第一巻に載せられた「凡例」を見てもわかるように、『全宋文』は著者別でまとめられ、その著者の配列は年代順、各文章の配列は文體ごとにとまとめられている。しかし生没年不明の者も多く、また文章の分類に頭を悩ますことも再三であった。また經注、語錄、歷史書、隨筆各全冊、佛教道教文獻等の扱い（これらは結局省かれた）、「宋」

國際宋代文化研討會と全宋文編纂室（土田）

の時間的空間的粹付け（遼、西夏、金は加えず、五代・元にひかかるものについては適宜對處している）等についての検討にも時間をかけねばならなかった。一つおもしろいと思ったのは、他の時代の文獻に引かれた宋代の文章のなかで、『漢書』の景祐本（要するに百衲本）の卷末に付された校勘表のような宋代以前の典籍に關わるものの調査もなされていることで、目配りのよさには一驚する。ともかく現代の要求に應ぜられる合理的な編集を企てるとともに『全唐文』など過去の遺産との連續も考慮されており、よく短期間に基本方針を決定できたものと感心する。また評點を加える作業には當然不安がつきまとう。新式評點は日本の訓讀まではいかないがそれに近い努力を要する。私は以前北京大學で熊國禎氏（當時、中華書局哲學編集室主任）の「中國哲學古籍整理概論」という授業を聞かせてもらったが、これはあらかじめ大學院生に白文をわたして新式評點をつけてこさせ、それを添削しながら授業を進めるというユニークなもので、この作業がそう簡単ではないことを實感している。楊明照氏は『全宋文』の評點作業について「もし誤りが多かったら、日本・臺灣で笑われるかもしれない」と言ったそうだが、我々には面映ゆい言葉である。瑕瑾をあげつらうのはたやすいかもしれ

ないが、現在の日本の學界の實力からして、一つの研究機關がどこまでこのような難作業をこのような速さで遂行できるであろうか。

ところで、各文章のデータは最初は短冊型のカードにとられ、それを配列してコピーし、それが更に大判の冊子の形にとじられた。今回それらを見せてくれたが、その時たまたま目にしたカードの例をあげておく（原物は横書）。

《伏波廟記》

蘇軾 澄邁縣志11／12 科院膠卷（マイクロフィルム）

「漢有兩伏波」至「无言我意同」

報黃山谷書

蘇軾 竹莊詩話10／194 中華書局

「古風二首」「詩之風」僅三句

〔論茶墨〕

蘇軾 高齋漫錄4 叢集

奇茶妙墨……德操一也。

「伏波廟記」（「伏波將軍廟碑」）は「東坡先生全集」一七にも收載。ともかく地方志、詩話、隨筆からも丹念に集めているが、他にも『宋以前醫籍攷』のようなものからも拾ったりしているのであって、おそらく付隨して出てくる成果も少な

くあるまい。その後、コンピュータの導入がなされ作業は格段の進捗を見せるようになった。それがどのように使用されているかについては、曾棗莊・程光鉞・沈治安・李小川「計算器補助整理宋代文獻的研究」（『國際宋代文化研討會論文集』、四川大學古籍整理研究所、一九九一年五月）に詳しいが、ここではこれを使った企畫を紹介しておく。

『宋人傳記資料索引』人名四角號碼索引（宋代人名二四六〇〇を收録）、『釋氏疑年錄』（宋代部分）人名索引、『宋詩紀事補遺』人名索引、『邵氏聞見錄』人名索引、『全宋文』作者人名索引、『全宋文』作者生年索引、『現存宋人別集簡目』、『全國省志宋人傳記資料索引』

また次の検索メニューをもつ「宋人總合資料機檢軟件（ソフト）」も試行され始めている。

○、ある宋人の全ての關係資料 一、姓名、字、號、諡、別稱 三、籍貫 四、入第、入等、入仕年あるいは官職 五、親族關係 六、宋人著述 七、宋文目錄 八、總合資料出處 九、ある宋人についての研究論著論文目錄 E、終了

さて文科樓の一畫にある研究所は廊下の入口に「古籍所」と赤字で鮮やかに書かれていて、全宋文第一編纂室、全金文

獻編纂室、その他の部屋が並んでいる。まず資料の収集状況であるが、これはさすがに誇るだけのことはあった。日本に比べればまた別であるが、中國の大學の圖書館の一般的情況を知る者にとっては、かなりの充實と見られた。國內で發行されたものはもちろん、臺灣の出版物もよく集めている。まず目を引くのは『四部叢刊』、『四明叢書』、『古今圖書集成』、『四部備要』（一部分）、文淵閣『四庫全書』、それに新印古籍、評點本、影印本の類、目錄カード。（『叢書集成初編』、『百衲本二十四史』、『宛委別藏』、『中國省志匯編』もあるはず。）また大量の製本された宋人の文集や地方志などのコピー。このコピーが他からとりよせた文獻であって、その中には『靜嘉堂秘籍志』などもあった。五二二閱覽室には臺灣出版の『宋會要』、『宋史資料萃編』、かなり網羅的に揃えた大陸出版の引得、辭典の類、それに寄贈の雜誌類。テキストを問題にすれば物足りぬ面はあるが、限られた條件の中でよく集めたと言つてよいであらう。ここで私は先述のカードをコピーして作成した冊子、及び「全宋文篇名排比登記表」、「全宋文集外圖書普查登記表」、「宋史人名索引」などを見せてもらった。またコンピュータームでは係の人が今回の参加者の題目と氏名を打ち出して見せてくれた。その他コピーの機械や

國際宋代文化研討會と全宋文編纂室（土田）

マイクロリーダー、大量のマイクロフィルムの缶なども目にした。解説してくれた若手の所員たちの顔には、意義ある事業に参加しているという使命感和誇りが窺われた。

以上で既に與えられた枚数が盡きてしまった。『全宋文』の出版の速さは驚異的であるが、この研究所では更に多くの企畫を遂行している。そのうち『現存宋人別集版本目錄』が刊行されているのは周知のところであらう。最後にその他の計畫を列舉してこの稿を終えたい。

『宋人年譜集目』・『宋編宋人年譜選刊』（以上は既に入稿）、『現存宋人著述總目』（既に脱稿）、『宋文紀事』・『宋人別集敍錄』（紹介が祝尙書「《宋人別集敍錄》凡例及選刊」にある、四川古籍整理出版通訊」第八期、一九九一年七月）・

『宋人傳記資料索引補編』（以上はまもなく脱稿）
『全金文獻』、『全金文獻研究資料叢刊』（黑龍江人民出版社刊行豫定）、『全金書錄』・『金人傳記資料索引』・『全金詩文詞曲紀事』・『金代文學作品選』・『金代文化史』・『金代文學史』・『金與宋遼夏元關係史』等（以上豫定）